

絵葉書によるひきこもりピア・アウトリーチ開発実践研究

—ピア・サポーターと当事者双方に無理なく社会的孤立予防を図る試み—

○ NPO 法人レター・ポスト・フレンド相談ネットワーク 田中 敦 (No.002891)

[キーワード] ひきこもり、ピア・アウトリーチ、社会的孤立予防

1. 研究目的

ひきこもり援助の喫緊の課題が当事者及び家族の高齢化という二重の生活不安にさらされている在宅高年齢ひきこもりへの対応策である。現在ひきこもり支援において有効とされる狭義のアウトリーチとして位置づけられる家庭訪問支援は専門性が求められると同時に利用対象となる当事者にとっては精神的負担感が強くさまざまな課題が残っている。

そこで本実践研究ではひきこもり当事者経験者団体である当 NPO が中心となってそこに所属するひきこもり経験を有するピア・サポーターと家庭にひきこもる当事者双方がお互い無理なく接触可能な絵葉書を活用したピア・アウトリーチの開発を目的に、当事者の社会的孤立予防を図り適切な社会資源サービスにつなぐ方策を検討するために実施した。

今日のソーシャルワークはいかにひきこもり当事者一人ひとりの思いを汲み取り彼らが主体者となりうる援助が行われていくかが重要な鍵となるが、残念なことに福祉専門職の方向性は福祉専門職団体の動向をみても上級認定資格取得に主眼が置かれ当事者との協同実践を図る姿勢はまだまだ遅れがちと言わざるを得ない。さらに現代社会のなかで生きづらさや制度の狭間に置かれてきたひきこもり当事者の経験的知識を活かしたひきこもりピア・サポート活動はひきこもり援助実践の新たな切り札としてその重要性が指摘されながらも実践現場において広がっているとは言い難い。本実践研究における日常の絵葉書を活用したピア・アウトリーチ活動や仲間とのさまざまなピア・サポート活動などを通して明らかにしていくとともに、従来の福祉専門職領域が培ってきた「専門的知識」と、ひきこもり当事者自らの体験から蓄積してきた貴重な「経験的知識」との結集によってひきこもり援助の新たな「実践的知識」を生成していく取り組みが求められるといえる。

2. 研究の視点および方法

本実践研究では電話や対面援助が困難な在宅ひきこもり当事者のニーズに対応できる絵葉書を活用したピア・アウトリーチ方法をとる。近年は手紙のツールも電子メールやチャット、SNS さらにはビデオ通話といった情報伝達技術の普及によって多様化しているが、本実践研究では言語性と非言語性を併せもつ絵葉書を採用し、絵葉書はひきこもり経験者が毎回独自に作成して原則月 2 回の頻度で多様なパターンを試行しその効果を見ていった。さりげなく絵葉書が投函してから届くまでの時間的ゆとりや紙媒体ならではの手のぬくもりが重荷を背負い疲れている当事者にはよい効果をもたらすという仮説のもと実施した。

3. 倫理的配慮

一般社団法人日本社会福祉学会研究倫理指針に従う。とくに本研究では第 2：指針内容 C.調査に関係してひきこもり当事者本人やその家族の了解のもと個人や地域、所属先など

の情報が特定されないよう十分配慮しながら実施した。

#### 4. 研究結果

北海道内の当事者会や家族会等に協力を呼びかけひきこもりピア・サポーターから絵葉書を受け取ってみたいと思う在宅ひきこもり当事者に対して毎年度継続意思を確認しつづ月2回の頻度で絵葉書の郵送活動を続けた。平成29年度時点の利用当事者は合計23名(男性19名・女性4名)で、利用年代層では10代~40代と幅広い。いずれも私たちピア・サポーターとは一度も対面したことがなく絵葉書を通してつながっている当事者であり、彼らとのピア・アウトリーチ活動を通して主に次のような実践研究結果が得られた。

①.文通を前提とした手紙相談とは異なり絵葉書によるピア・アウトリーチはピア・サポーターの個人名で郵送する「返信を求めない」片思いのアウトリーチであることから当事者の精神的負担感は少なくとりあえず受け取ることは大丈夫とする事例が多く見られた。

②.絵葉書によるピア・アウトリーチは当事者向け発信ではあるが外部から絵葉書が届けられることで同居する家族にも社会的孤立していないというある一定の安心感を与え絵葉書を題材とした当事者本人との会話にいくばかりか寄与することが少なからず見られた。

③.絵葉書はひきこもり経験者ならでは、それぞれ創意工夫したイラストや写真に長文ではなく短信のメッセージを添えて郵送したがこのコラボレーションが当事者にとっては好評で毎回「どのようなものが届くのか楽しみ」とする感想が多くあった。

④.平成30年新春に当事者11名から年賀状が届いたことや本人は「絵葉書には必ず目を通しています」「自室に絵葉書をもっていきます」「部屋に飾っています」など家族から寄せられる便りなど予期せぬ反応が少なからずあったことはピア・サポーター実践者としても嬉しい体験であり、お互い支え合うピア・サポート活動の営みを果たすことができた。

#### 5. 考察

本実践研究は当NPOが平成26年度の試行事業から開始し平成27年度から事業化して取り組んできたものである。ソーシャルワークにおける絵葉書を活用した先行研究は残念ながら見られず、いくつかのひきこもりを支援するNPOや家族会でその実践がなされている実態に留まり、その必要性が問われつつも実践研究としては進展していないのが現状である。そこには専門職としての電話や対面援助とは異なる文字や絵・イラスト・写真で伝えていく時間と労力が求められる援助の難しさがあるのではないかと考えられるが、こうした実践活動に従来の専門職の視点だけではない、ひきこもり経験者としての視点や知識が加わることでひきこもり援助実践として相乗効果を増すものと考えられる。

また自助会などで一度は対面したことがあるが最近姿が見られなくなった当事者にも心に留めて絵葉書を郵送したところ感謝の返信があり再び参加し始めた事例も見られた。

返信を求めない絵葉書によるピア・アウトリーチは北海道・札幌市ひきこもり地域支援センターでも取り入れられるようになったほか、当NPOで効果を上げていることを知った沖縄県内の団体が専門性だけではなく感性も大事にした活動を展開し広がり始めている。